

# 千鳥

## 映画文学人生論

原作：鈴木三重吉（1906）「ホトトギス」

参考：『赤い鳥』（1918年創刊）  
（1936年廃刊）

参考：夏目漱石『文鳥』（1908）  
『夢十夜』（1908）

千鳥々々とよくいうのは、その紋羽二重の袖の銘柄である

夏目漱石の短編に『文鳥』というのがある。小説のような随筆のような小品だが、これに鈴木三重吉が登場している。

「十月、早稲田に移る。伽藍のような書齋に只一人、片附けた顔を頰杖で支えていると、三重吉が来て、小鳥を御飼いなさいと云う。飼ってもいいと答えた。然し念の為だから、何を飼うのかねと聞いたら、文鳥ですと云う返事であった」。

三重吉は東京帝国大学英文学科で夏目漱石の講義を受け、創作を志したが、創作だけでなく、神經衰弱も師にならって、休学した。『千鳥』の構想を思いつき、執筆しはじめたのは広島県能美島で静養中のことである。

漱石に原稿を送ると、「僕名作を得たり」というお墨付きで、『ホトトギス』に献上され、明治三十八年五月号に掲載された。『千鳥』は能美島の浜にいる千鳥についての写生文ではない。語り手の自分が島でお藤さんという女性とめぐりあった。彼女が机の引出に遺していた緋の紋羽二重の襦袢の片袖の銘柄が千鳥だ。

「或西の国の小島の宿りにて、名を藤さんという若い女に会った。女は水よりも淡き二日の語らいに、片袖を形身に遺して知らぬ間にいなくなつてしまった。去つてどうしたのかわからぬ。それで沢山である」。



## 千鳥——映画文学人生論

「袖を畳むところ思う。この袖の中に十七八の藤さんと二十ばかりの自分とがいつまでも老いずに封じてあるのだと思う。藤さんは現在どこでどうしていても構わぬ。自分の藤さんは袂の中の藤さんである。藤さんはいつでもありありとこの中に見る事が出来る」。

淡い初恋とはかない別れ——ロマンチックな話である。現実の結婚生活はともかく、漱石と三重吉の師弟はともにこのころの片隅にロマンチックな何かへのあこがれを秘めていたようだ。

漱石は文鳥が自分を見た時、自分は思い出したと書いている。「昔し美しい女を知っていた。この女が机に凭（もた）れて何か考えている所を、後から、そつと行って、紫の帯上げの房になった先を、長く垂らして、頸筋（くびすじ）の細いあたりを、上から撫で廻したら、女はものう気に後（うしろ）を向いた。その時女の眉は心持人の字に寄っていた。それで目尻と口元には笑が萌（きざ）していた。同時に格好の好い頸を肩まですくめていた」。

また、『夢十夜』には、「百年、私の墓の傍に座って待っていて下さい。きつと逢いに来ますから」と言って女が死に、真っ白な百合が鼻の先で骨に応える程匂ってきて、「百年はもう来ていたんだな」と気がつく夢がふくまれている。

白梅に千鳥啼くなり浜の寺

漱石